論文

大学の魅力発見と自校教育

喜村　仁詞（岡山県立大学保健福祉学部現代福祉学科、
アドミッション・高大連携センター）

要旨：大学の魅力とは、教育の受益者である受験生や在学生が評価し決定するものである。すなわち、大学は受験生に特長として認識する要素を提案するのみであり、受験生が魅力として認識しない限り、魅力とはなりえない。そのため、大学と受験生の間には“大学の魅力”の認識についてのギャップが生じる。そこで本研究では、大学の魅力についてグループワークで検討する授業（自校教育）を実施することで、在学生が知覚する大学の魅力を明らかにする。

キーワード：自校教育、大学の魅力、在学生、入試広報

1.　はじめに

1-1　大学の魅力

入試広報活動の役割とは、自大学の魅力を受験生に伝達し志願者に変化させることであろう。そしてそのために、大学案内や大学 HP、受験雑誌、そしてオープンキャンパス等様々なコミュニケーション・ツールを使用して大学の魅力を発信している。

しかし、大学が発信する大学の魅力は本当に受験生にとっても魅力なのであろうか。価値共創概念に基づくと、魅力（価値）は魅力(価値)の受容者が決定するのであり、提供者はあくまでも魅力（価値）を提案する存在に過ぎない。

したがって、大学側が魅力として発信する内容の全てを受験生が魅力として認識するわけではない。また、反対に大学が認識していない価値を受験生が魅力として認識している可能性もある。

そこで、受験生や在校生が自大学の魅力をどのように捉えているのかを把握することが効果的な入試広報活動の実施においては重要となる。

1-2　研究の目的

そこで本研究では、本学の学生を対象に、岡山県立大学の魅力として認知している要素についての検討を行う。調査対象としたのは、筆者が担当した 2023 年度第 1 クォーター開講の共通教育科目「人文・社会科学セミナーC」における受講生の大学の魅力に関する記述内容である。当該科目はアクティブラーニングの実践を目的としており、グループワークを用いて基礎的な分析手法を理解することを目的としている。

具体的には、経営学の視点を用いて自身を取り巻く環境について分析する能力・手法を身につけ、定性的研究方法を体験する内容としている。この授業の題材として取り上げたのが岡山県立大学である。各自が知覚している大学の魅力をグループで共有すること、また抽出された内容を調査・分析することを通じて、岡山県立大学の魅力

https://doi.org/10.15009/0002000093

を明らかにしていく。

なお、この授業は自校教育の側面を持っており以下の2点が副次効果として期待できる。

第1は、学生たちが本学を受験する際にどのような点に魅力を感じたのか、また実際に学生生活を送る中で知覚した本学の魅力とはどのようなものなのかを抽出することで、受験生にとって魅力のある広報内容の発信に寄与することが期待できる点である。

第2は、受講生が自大学の魅力を検討することにより、これまで知覚していなかった新たな大学の魅力に気付くことで、大学への理解を深め、大学満足度や愛校心、他者への推奨意向（クチコミ）の向上が期待できる点である。

喜村・大塚（2020）は国立大学の授業においても同様の調査を行っており、これまで大学で取り上げてこなかった広報すべき内容を学生が指摘したこと、併せて、受講生の大学理解や大学満足度、愛校心、推奨意向が向上したことを明らかにしている。

1-3　自校教育とは

自校教育とは「大学の建学の精神や歴史、社会的な役割や、行われている教育研究の成果など、自らが所属する大学の特性や現状を教える授業」（日本私立学校振興・共済事業団　2014）など自大学についての学びを指し、主に初年次教育の中で実施されている。自校を理解する、大学史（自校史）を知る、地域と大学の関係性を学ぶなどの内容がその一例である。既に多くの大学で導入されており、大川（2006）の調査では18%の大学が導入していたが、その後の不破（2020）による調査では53%と増加している状況である。自校教育は、初年次セミナーなど初年次教育の中のコンテンツとして実施されているものや、科目として実施されるものなど、その形態は多様である。また授業形態も講義や演習型式など様々であるが、概ね「学生が大学で学ぶことの意義や学習指針の形成を見出すことに寄与する目的」で実施されているものであり、愛校心の醸成を促進する効果を持つ（大川2006）。

2.　授業における取組

授業には環境分析のフレームであるSWOT 分析、収集したデータを分類するKJ 法を用いて、グループ内での相互インタビューによりデータを収集し、その内容を分析、抽出した要素を調査する。そして、調査分析結果をまとめ、発表を行う。

なお、受講登録者数は94 名であり、実際の受講者数は92 名であった。授業の概要および内容は以下の通りである。

【授業の内容】

第 1 回　オリエンテーション:授業の進め方
第2回　クリティカルシンキングについて
第 3 回　分析手法（SWOT 分析・KJ 法）について
第4回　調査：グループインタビュー
第5回　グループインタビューのまとめ：SWOT 分析・KJ 法
第6回　調査：実地調査
第7回　発表①
第8回　発表②

抽選により1グループあたり7名程度・

13 グループに振り分けを行った。これにより様々な学部学科の受講生によるグループ構成となっている。

第 1～3 回は講義形式であり、第 2 回は客観的な視点を持つためのクリティカルシンキングについて、そして第 3 回目はグループワークで使用する分析手法である SWOT 分析および KJ 法について事例を交えながら講義を行った。

第 4～6 回がグループワークである。第 4 回はグループ内で半構造化面接の手法を用いたインタビューを実施した。交代で質問者を担当し定められた質問項目について一人の受講生に聞き取り調査を行うものであり、質問者は得られた回答について自身の興味に基づき自由に掘り下げて質問を行う。また、質問終了後は、必ず他のメンバーが回答に対する質問を行うことを義務付けている。なお、質問項目は以下の通りである。

＜入学前に感じたこと＞
①なぜ県大を受験したのか
②県大がよいと思った点(他大学との比較)
③ちょっと不満に感じた点
④入学前には解りにくかった点
⑤入試の思い出(楽しかった･苦労した点)

＜入学後に感じたこと＞
①嬉しかった・面白かった点（入学して解った良い点など）
②現在取り組んでいることや、ちょっとした楽しみ
③ちょっと不満な点
④私だけの県大の自慢

第 5 回は、グループインタビューの内容の分析である。初めにインタビューの内容をＫＪ法で書き出す。次にその内容について、ＳＷＯＴ分析を用い内部環境の強み・弱み､外部環境の機会･脅威に 4 分類する。そして、4 分類した内容を組み合わせて、受験生に伝えるべき大学の持つ魅力を検討する。

第 6 回は、グループワークで抽出された本学の魅力について、実際に現場での実地調査や大学が公表するデータのチェックなどにより確認を行う。そして、発表に向けた資料の作成を行う。

第 7 回および 8 回は発表である。パワーポイントを利用して、1 グループ 10 分以内で大学の魅力について発表を行う。発表内容は、検討した大学の魅力と、各自の大学の好きな場所や風景の 2 点である。これにより、全員が発表する機会を持つことにしている。

そして最後に、グループワークにおける自身の役割を中心にグループワークの内容について記述すること、そして、自身が知覚する本学の魅力について記述することを課題とした。

分析に使用したのは、この自身が知覚する本学の魅力についての記述であり、個人が特定できない記述のみを抽出し、以下に分析を行った。

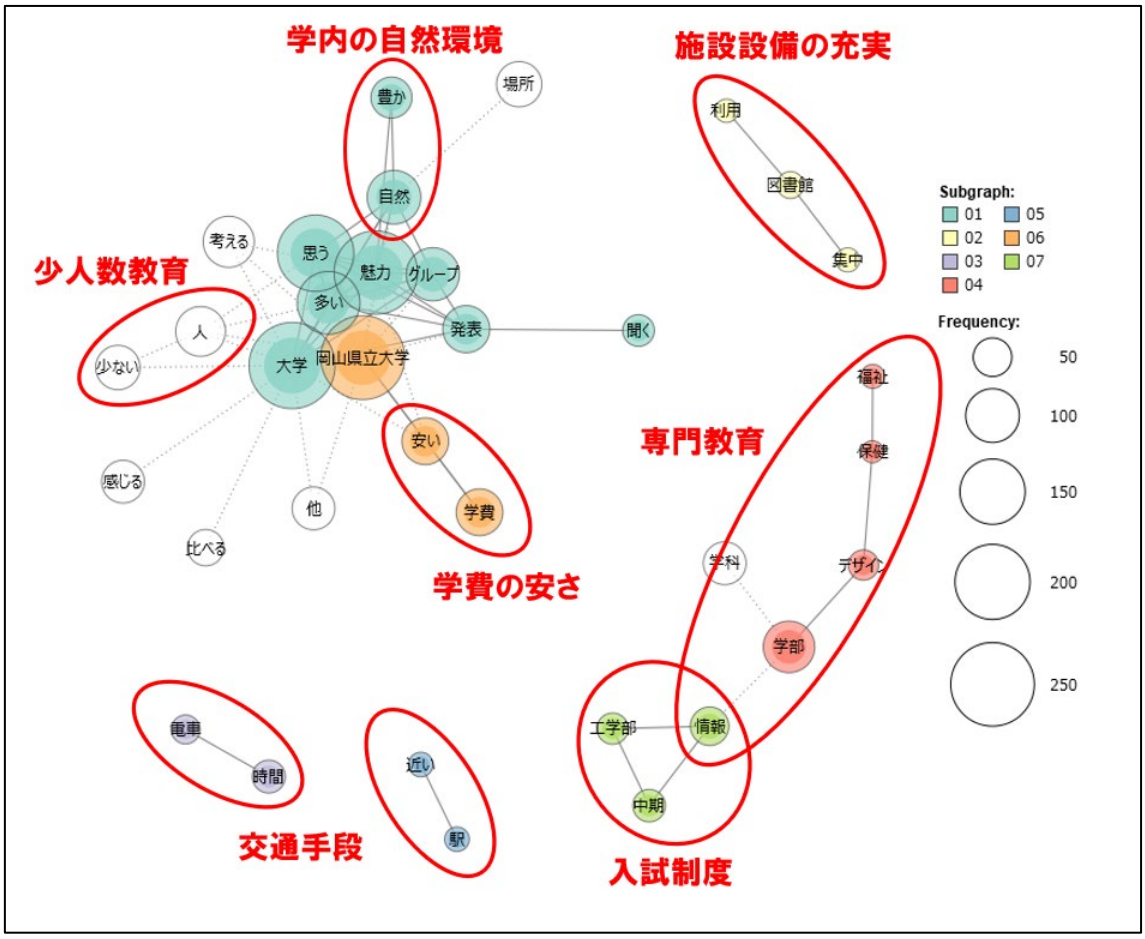
3. 結果

分析については、テキストマイニング用のソフトウエアである KH Coder を用いている。 KH Coder は、文章を単語・文節レベルで分析し、規則性のある情報を取りだすことができる統計分析ソフトである

（樋口，2014）。

図1は受講生が大学の魅力について記述した内容の共起ネットワーク図である。共起ネットワーク図とは、語と語のつながりや出現パターンの類似性から、文章中における語のつながりをネットワーク図として可視化したものである。記述されたすべての語を対象に、最小出現数をソフトウエアが自動的に設定した15回で設定し作成したものである。

図1をみると、受講生は大学の魅力として、主に「学内の自然環境」「施設設備の充実」「少人数教育」「学費の安さ」「専門教育」「入試制度」「交通手段」の7点について記述している。



そこで7点について、受講生の記述内容から、どのように評価されているのかを考察したい。

① 学内の自然環境

学内の自然環境については概ね肯定的に捉えられており、大学の魅力として認識されている。“虫が多い”とネガティブに捉える意見も紹介しながらも緑豊かで静かな環境を魅力とするなど、肯定的な受け止め方をする意見が多かった。なお、自然環境については、入学後に毎日の学生生活を送る中で知覚した価値であるといえよう。

＜受講生の記述例＞
「岡山県立大学には多くの木が植えてあり、勉強の合間に外の緑を眺めてリラックスすることが出来ます。食堂は全面ガラス張りで外の綺麗な景色を見ながらご飯を食べることが出来ます。また、キャンパス内に川もあり、蛍がいるほど川の水が綺麗です。学習環境が整っており、落ち着いて勉強することが出来るところが岡山県立大学の一つの魅力であると他のグループの発表を聞いて分かりました。」
「自然豊かでたくさんの樹が育っていることから四季を感じたり、ストレスを軽減したりするなど安らぎを与える場として魅力的であると思った。」
「岡山県立大学のように大学内の緑だけでなく、立地している周りの環境にも自然にあふれている大学は少ない。しかし、裏を返せば「虫が多い」や「田舎過ぎる」といったマイナスな意見もあった。そういったマイナスな意見も実際に来てみれば印象が変わったという人も居たため、PR の方法に工夫をし、実際に訪れる機会が増えれば受験生にもますます岡山県立大学の「自然」という魅力に気づいてもらえると思った。」

② 施設設備の充実

図１で示された「図書館」に関する記述については、その他の施設設備と併せて言及されている事例がほとんどであった。また、これら施設設備については、入学後に「田舎のために他に行くところがなく、勉強したり図書館に行くことが多い」など、大学内の自然環境と併せての記述も多く、学生生活を送る中で知覚した価値であるといえよう。
＜受講生の記述例＞
「岡山県立大学はキャンパスが広く、入学当初はよく迷っていたけど、十分な敷地があるために様々な施設がそろっており、学びを深めることができます。私も図書館や実習室をよく利用しますが、きれいな設備で整った環境の下で学習できるので気に入っています。」
「岡山県立大学の魅力について、各グループのお気に入りの場所を知ることができて、より魅力が増したと思います。知らなかったスペースや、知っていたけど利用したことがなかった場所など行ってみたいと思うところが多くありました。例えば、学生会館の奥に進んだところにあるイスのスペースや、図書館の入り口の勉強スペースや、喫茶店などです。」
「次に設備が充実しているという魅力がある。英語の勉強をしたいときはグローバルラーニングセンターや語学推進室を活用できたり、グループ閲覧室がある図書館、どの学部生でもパソコンを使用できる演習室などがあり、勉強をしたい人にとってはとても良い環境となっていると感じた。」

③ 少人数教育

少人数教育については、学生数に対する教員数の多さに関する文脈での記述が多い。国公立大学の特長であり入学前に知覚できる価値ではあるが、多くの受講生がこの授業で受講生たちの意見や他のグループの発表を聞いて知ったと記述している。
＜受講生の記述例＞
「教授や教員の多さについて深堀していたグループは、県立大学の生徒数に対する教員の数を調べるだけでなく、他の大学の生徒数に対する教員数も調べていることで、より県立大学の教員の多さが分かりまし

た。」

「多くのグループで「生徒数に対する教員数の多さ」という良さについて述べられていました。講義の後で自分でも調べてみましたが、医学部がない大学の中では生徒当たりの教員数は岡山県立大学がトップレベルに多く、この強みは、アドバイザー面談などの学生をサポートする制度が充実している強みなどにつながっていくため、岡山県立大学において非常に重大な良さであると感じました。

④ 学費の安さ

学費の安さについては、国公立大学の特長の一つであり、入学前に知覚している価値ではあるが、グループワークで他大学との比較を行うなどにより改めて実感する受講生が多かったようである。

＜受講生の記述例＞

「経済面では､他大学と比べて学費が安く、県立大の位置する総社市の家賃が県内の他の物件と比較しても安価で、経済的な一人暮らしをしたい学生に向いている。」

「学費が安い点である。私立大学と岡山県立大学の初年度納入額を比べるとおよそ74万円もの差がある。県内進学者の場合はこの差はより大きくなる。」

「岡山県立大学の魅力は「安い学費で就職に直結する実用的な分野の学問が学べるので、進路を実現しやすい」ことだと思います。」

⑤ 専門教育

デザインや情報系の学部など､“公立大学では少ない専門分野が学べる”という記述が多い。また、少人数教育と併せて本学の魅力として捉える記述も多い。専門教育については入学前に知覚できる価値であり、学部学科選択を行う上で最も重要な要素である。

＜受講生の記述例＞

「岡山県立大学では学部、大学院ともに専門性豊かな教育陣が指導しており、実践的な教育に力を注いでいます。」

「珍しい学部があることだ。保健福祉学部やデザイン学部など専門的な科目が多いので、岡山県内でより専門的なことを学びたい人や資格を取りたい人は魅力を感じるのではないかと思う。」

「県立大学としては少ない情報工学や、デザインなどの学部もあり、他に比べて安い学費で専門的なことを学べるという魅力は大学選びを迷っている高校生に伝えたい内容だと思いました。」

⑥ 入試制度

入試制度については、情報工学部で実施する中期入試のように他大学ではあまり実施されていない受験機会であるという意見、そして、科目数が少ない・面接だけで国公立大学に受験できるなどの試験のハードルの低さに関する意見の２点の記述がみられた。入試については、入学前に知覚する魅力であり、受験生が最も関心を持つ価値であるといえよう。

＜受講生の記述例＞

「情報工学部の中期入試制度だ。大学の中期入試は公立大学でのみ行われ、その中でも情報系の学部・学科の入試があるのはわずかである。」

「実際に私も第一志望の大学は別の大学でしたが、二次試験の記述が苦手で最終的に第一志望はあきらめて面接と志望理由書、調査書だけで受験ができる岡山県立大学に決めました。」

「まず受験において、自分の得意なことを生かせるという魅力がある。岡山県立大学は二次試験が一教科であることや面接であることがほとんどであり、特に情報工学部は前期、中期入試ともに数学だけであり、栄養学科の後期試験は面接だけであったり、看護学科は文系の人であっても受験ができる。」

⑦ 交通手段

交通手段については「駅からの近さ」「電車のダイヤ」の 2 種類についての記述がある。「駅からの近さ」については魅力的な要素として評価されているが、「電車のダイヤ」はネガティブな要素として捉えられている。これらは入学前に知覚できる価値ではあるが、入学後の学生生活を通じて、より実感する価値であるといえよう。また、”本数の少なさ“というネガティブな要素を他の要素で打ち消そうとする記述も多くみられたのであり、このことは SWOT 分析を用いた成果であるといえよう。

＜受講生の記述例＞

「最後に 3 つ目は、駅に近いことだ。岡山県立大学から歩いて駅までは 5 分もあれば十分につく距離である。駅に近いことにより交通の面では便利である。」

「暑い日や雨の日などは電車が来るギリギリまで大学にいることができるので、雨に濡れたり、暑い思いをしたりすることなく電車を待つことができる。」

「電車の本数が少なくダイヤも悪いというデメリットもありますが大学内の駐車場・駐輪場が大きいので自転車や車で通学しやすいです。」

「電車の本数も少なく、周りに時間を潰すお店もありません。ですが、そういう環境だから時間潰しに図書館に行って本を読んだり、演習室にいって自主学習をするといった普段しないような事を出来る土地です。」

4. 考察

上記の結果に基づく考察は以下の 3 点である。

第 1 は在学生の知覚する大学の魅力を抽出したことである。表 1 は抽出した大学の魅力要素のまとめである。大学の魅力要素は、施設設備に関するもの、教育内容に関するもの、学生生活に関するもの、入試に関するものに 4 分類できる。すべての要素を入学前に知覚することは可能であるが、受講生の記述からは「学内環境」「施設設備の充実」「少人数教育」の要素については、主に当該授業を受講しグループワークや他のグループの発表内容で知覚した価値であることが示された。

表 1　大学の魅力の分類

分類	大学の魅力要素	授業で知覚した価値
施設設備	学内の自然環境	○
	施設設備の充実	○
教育内容	少人数教育	○
	専門教育	
学生生活	学費の安さ	
	交通手段	
入試	入試制度	

第 2 は在学生が知覚する魅力と大学が発信する情報とのギャップである。

2023 年度入学生を対象とした大学案内においては、冒頭の部分で「共通教育」「吉

備の杜」について、そして「専門教育」、「就職等学生支援」「クラブ活動等学生生活」「キャンパス内の環境」の内容が続く。大学の最大の特徴を冒頭部分で訴求する手法が一般的であるが、冒頭の部分で訴求した「共通教育」および「吉備の杜」については、今回の受講生たちの記述ではほとんど言及されておらず、大学が特に魅力として考える内容が在学生には魅力として認識されていない状況が明らかになった（共通教育についての記述はなく、吉備の杜についての記述は4名であった）。

なお、この要因については次の2点における大学と受講生とのギャップが考えられる。

①表現方法や訴求内容において受講生が認知しやすい表現等とのギャップが生じている可能性である。地域での教育に関する記述が共起ネットワーク図には示されないものの複数が魅力として記述されていることから、吉備の杜についても、表現方法や訴求内容の見直しなどを検討すべきであろう。

②そもそも当該要素が魅力として認識される要素ではない可能性である。特に共通教育は、学問系統により大学を選択している受験生にとってはあまり関心のないカリキュラムであるといえる。大学として発信すべき内容であることから、その表現方法や掲載ページ、スペースなどの再検討も必要であろう。

第3は、受講生の意識の変化である。マイナスイメージだった要素を魅力的な価値に変換して知覚する記述が随所に見られた。受講生は、グループワークを行うことで、これまでのネガティブな大学への認識を肯定的な認識へと変化させる行動をとるようになったのである。

なお、この行動は認知的不協和（Festinger 1957）の視点からも説明できる。不本意入学者など何らかの大学に不満を持つ者は、不満を持つ現状と本来実現したかった理想の姿のギャップを解消しようとし、ポジティブな情報を探すなど、自らで現状を肯定的に捉えようとするのである。

＜受講生の記述例＞

「しかし、電車の本数は1時間に1本しか出ていないので電車の到着までの待ち時間が長くなることがあり、不便だと感じる人もいるかもしれないが、岡山県立大学には次の電車が来るまでの時間を有意義に消費する環境が整っている。」

「弱みも色んな事と組み合わせると強みになったりするのがとても面白く、新しい観点で物事を考えることができました。また、学生一人一人のお気に入りの場所では自分もまだ発見していなかったような素敵な場所が多かったです。」

「電車の本数が少ないことは少し不便ですが、メリットを考えると余裕をもって行動する習慣が身についたり、余裕を持って行動することで生まれた時間を使って勉強したり有意義に使うこともできます。」

「田舎に大学があるため周りに遊びに行ける場所が少ないことや電車の本数が少ないことがマイナス面として挙げられていたが、自然が豊かであるという魅力と表裏一体であると思う。」

5. おわりに

本研究の貢献は以下の2点である。

第1は、在学生が知覚する本学の魅力を明らかにした点である。在学生は本学の魅

力として主に施設設備として「学内の自然環境」「施設設備の充実」、教育内容として「少人数教育」「専門教育」、学生生活として「学費の安さ」「交通手段」そして「入試制度」の7点を挙げている。これらの中で、「学内の自然環境」「施設設備の充実」「少人数教育」「交通手段」については、多くの受講生が当該授業の中で再認識した価値である。

一方、「専門教育」「学費の安さ」「入試制度」については、“学びたい専門分野（専門教育）がある国公立大学（学費の安さ）にどうすれば入学できるのか（入試制度）”という受験生の大学選定基準が窺える。すなわち、本学入学者の多くは、本学の持つ専門教育以外の特長（例えば、地域とのかかわり）にはあまり関心を持たずに入学してきたのであり、入学後もガイダンスで案内等があったにもかかわらず、あまり関心を持っていなかったことが考えられる。

大学案内等受験生向け広報や入学直後のガイダンス等における吉備の杜など専門教育以外の学びや体験等についての告知方法・内容について、今一度検討する必要性を示唆するものであろう。

そして第2は自校を再発見する機会（自校教育）が在学生に大学の魅力を知覚させることを明らかにした点である。当該科目では、一人ひとりの学生が知覚する本学の情報をグループワークやその後の発表によりで共有することで、受講生たちがこれまで知らなかった大学の魅力を知覚するようになったことが明らかになった。また、SWOT分析を用いることで、これまでマイナスイメージを持っていた要素を大学の魅力に変換して知覚するようになることも明らかになった。

なお、今後の課題として挙げられるのは2点である。

第1は本研究で得た知見の本学の入試広報活動への活用である。本研究は一部の学生を対象としたものであるが、本学の入試広報活動の見直しを示唆するものである。そこで、このような取り組みを全学的に実施し、PDCAサイクルのC（チェック）の一部として組み込むことなどを検討すべきであろう。

そして第2は、このような自校教育の機会を増やすことである。一般入試では、大学入学共通テストで志望変更する学生も多く、その多くが充分に大学の内容を検討せずに受験産業による合格可能性だけで受験校を決定している。また、志望校を下方修正した者は不本意入学者になりやすく大学に不満を持ちながら入学することになる。

本研究で示した在学生が大学の魅力を知る取り組みは、本学の内容をあまり理解せずに入学した学生の大学への満足度を向上させ、大学の活性化に寄与するものとなるであろう。

注：本研究はJSPS科研費 21K02661の助成を受けたものです。

参考文献：

・Festinger (1957)　A Theory of cognitive dissonance. *Stanford University Press,* 末永敏郎 監訳(1965)　認知的不協和の理論－社会心理学序説－，誠信書房.
・不破克憲（2020）大学における自校教育の様態に関する一考察、アドミニストレーション研究、第10号：106-120.

・樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版.
・喜村仁詞・大塚智子（2020）学生が創る学生募集広報―理論検証型から理論生成型手法への転換-、大学入試研究ジャーナル、第30号：66-73.
・日本私立学校振興・共済事業団（2023）大学ポートレート用語辞典、https://www.shigaku.go.jp/p_dic_c006.htm（2023.1001アクセス）
・大川一毅（2009） 大学における自校教育の導入実施と大学評価への活用に関する研究、 平成20～22年度科学研究費補助金（C）研究成果報告書.

Discovering the Attractiveness of Our University through Education about Our University

Hitoshi KIMURA*
*** Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University**
*** Center for Admissions, Education and Research, Okayama Prefectural University**

Abstract: The attractiveness of a university is determined by its current students. Universities only provide value to current students. Therefore, the attractiveness proposed by universities and perceived by current students are different. In this paper, we identify the attractiveness of universities as perceived by a workshop in which our students consider the attractiveness of our university.

Keywords: Education about our university, Attractiveness of university, Student, Admissions Public Relations